

【塩野川沿革史】 水 天 宮 ・ 熊 野 神 社

梁川町郷土史研究会 菅 野 康 男

水 天 宮 (元舟場)

阿武隈川に橋が架かる以前は、梁川から五十沢、大枝、さらに国見方面や宮城県への交通は梁川舟場で渡し舟を利用した。舟場は渡舟場、舟運の河岸場として要所であった。

嘉永4年(1851)7月10日、梁川舟場の渡し舟が難破沈没。乗合30人が溺死したとみられる大きな事故が発生した。

この舟に乗る予定であったが、何らかの事情で乗れなかった人たちもいて運が生死を分けた。梁川見付の佐藤家にこのとき難をまぬがれたご先祖の伝えがある。

安政5年、亡くなられた方々の供養、水難除けなどを祈願し、みんなの協力で水をつかさどる水天宮碑が建立された。



水 天 宮 (元舟場)

場所は、今の梁川橋西の水門の辺りで、境内もあって子どもたちの遊び場や休けいの場になっていたが、阿武隈川の堤防工事その他の事情で3度移転し、現在地に安置された。

水天宮は安山岩2枚の台上にある花崗岩の碑で高さ135cm、幅80cm、厚さ43cm。全体としてどっしりとした重厚な姿であり、水天宮の大きな文字もそれにふさわしく威厳がある。

この文字の原本となる書が見付の佐藤家に保存されてあったが、現当主勝夫さんのご好意により、佐藤信雄さんを介して舟場集落に贈られた。現在、掛け軸として表装され、大切に保管されている。



水天宮(霞翁筆 碑の原本)

祭礼は毎年4月に行われている。現在は水難除けはもちろんのこと、初宮詣り、安産祈願など諸々の祈りの場、神として信仰されている。

水天宮碑は上町の天神社境内、山舟生字高橋の川沿い、八幡字取揚など各地に見られる。全国水天宮の総本山は、福岡県久留米市にある神社で、天御中主之神、安徳天皇、建礼門院、二位尼時子を祀る。航行安全の水神として信仰を集めている。

熊 野 神 社

以前は弁才天

室町時代末、弘治4年(1558)の「梁川八幡宮祭礼規式写」に、伊達66郷の各鎮守・氏神・^{ねぎ}祢宜の名が記されている。

梁川では上町の天神社、小梁川の八竜権現(射箭神社)、暮坪の富士大権現(浅間神社)、塩野川の弁才天の4社である。梁川の神社で中世に存在した確実な史料を持つ4社といえる。

「塩ノ川、氏神弁才天、祢宜宮太夫」とあり、中世には塩野川集落や河川合流地域の農耕神・水神として信仰されていたのではないかと。弁才天の元は古代インドの河をつかさどる神であったといわれる。

時代の変遷は、その経過の中で興亡があり失われた廃社、別尊を祀る社名変更も少なくない。いつしか古社の弁才天から熊野神社が氏神となった。

熊野神社

神仏習合、熊野三山は死者の霊をまつる山中の他界、紀州熊野は浄土信仰の中心となり、御師・先達^{おし せんだつ}の案内する熊野詣りは「蟻の熊野詣」といわれるほどさかんであった。伊達66郷の中では大門・伊達崎・

光明寺・山戸田 板谷内の氏神は熊野神社である。近世の熊野修験者のはたらきによって熊野信仰は全国的に広められ高まったと考えられる。信仰には参詣がともなう。近世になると御師・先達の全国的な集団組織により協力が得られ、絵解しながら物見遊山的な要素も加わり、講の組織も生まれている。

柳田の大膳院と岡村の極楽院が、伊達における修験の頭であった。



熊 野 神 社 (祭りの日)

熊野神社略年表

○享保16年。「梁川村指出書上帳」によると「天神宮、3間4面、文殊ほこら2尺4方、雷神ほこら2尺4方、神尾太夫。富士権現ほこら壱尺4方、神尾太夫。熊野神社ほこら貳尺4方、是ハ当村ノ内塩野川野府之内ニ御座候所之者共寄合様ニ而別当社人無座御候」

○天保12年。塩野川熊野権現詞宮に昆野阿佐比を許可す(関根家文書目録)

○明治11年。熊野神社(塩ノ川)祭神^{いさなぎのみこと}伊弉諾命・樟^{くすひのみこと}日命、祭礼日10月18日、由緒・勸請詳らかでない(神社明細帳)

○梁川町史資料集第29集より

小社熊野神社。

西塩ノ川ニ鎮守ス、社地東西6間南北6間5分 反別21歩（民有地）伊弉諾命樟日命ヲ祭ル 由緒勸請詳カナラズ 神殿東西2尺5寸南北3尺拝殿へ贅棚拝殿東向ノ間 南北1間半 例祭10月15日 境内に弁天宮アリタリ 梁川四社ノ一ニシテ今熊野神社ニ命祭シ塩野川ノ鎮守

○昭和53年 新鳥居完成

○昭和58年 社殿改築造営

○平成21年 現鳥居建立

青面金剛像（半浮彫）の碑

（熊野神社境内）

しょうめんこんごう
青面金剛は、庚申講の本尊とされ、さんし
三尸の病を除く尊として信仰を受けていた。

庚申信仰は、中国の道教思想に由来し、日本の民間信仰の中で独自に発展した。

人の体の中にはさんし
三尸虫という虫がすみ、上尸虫は頭の中にすみ、目を悪くし顔のしわをつくり髪の毛を白くする。中尸虫は腸の中にすみ、五臓六腑を害し飲食を好ませる。下尸虫は足にすみ、精を悩ますとされる。さらにこの三尸虫は60日ごとにおとずれる庚申の日の夜、人の睡眠中に体から抜け出し、天帝にその人の悪行を報告するという。

天帝は司令道人に命じて、その人の罪科に応じて命を縮めるという。大きな罪には紀を奪い小さな罪には算を奪う。算は3日紀は300日である。紀を失い算がなくなったときその人の命は尽きるという。

そのため、庚申の日の夜は三尸虫の昇天

を阻むため人々が集まり、念仏や詠歌や物語りなど庚申講の行事を夜を徹して行う風習が広まった。

庚申待は平安貴族の間に始まり、近世に入っては近隣の人々が集まって共に食事を楽しみ、語りあい、伝統を受け継ぐ行事として、地域の共同体を形成する大きな役割を持つ庚申講の風習が盛んになった。



青面金剛像

（庚申講の本尊とされる）

3年ごとに、庚申供養の儀礼を行い、特別に塚や碑を建立する風習は江戸時代に高まり盛大な庚申会もあった。

庚申信仰はまた神道の猿田彦神とも結びついているが、猿と申が通じたことが原因の一つになっているといわれる。

須郷先生之碑

（熊野神社境内）

しんきよくりゆう
碑には、題字の外に、心極流 体術須

郷金兵衛武真、7月2日、下部に門弟の代表と思われる鹿俣利右エ門ら12人の名、左側面に門弟1200人余、などが判読される。

西塩野川の因藤家に「今の大町2丁目辺りで大内屋を営みながら剣術を教えていた。須郷は祖先の姓」の伝えがある。



須郷先生の碑
(多くの門人を指南)

剣術

京都三条通りにある今川越前守吉道の道場入門、免許皆伝を受けて故郷の丸森にたかぎひけんのじょうすけなが道場を開いた高城飛剣尉佐長は、すぐれた高弟を世に送り出し文政9年に没した。

高弟はそれぞれ道場を開き今川流中心の剣術を広めた。教えを受けた門弟たちが建てた記念碑は山舟生、白根、丸森などにみられるが、須郷先生之碑も同系統の一つである。

心極流

剣術の流派は多岐にわたり明治には500を超えるといわれた。

心極流はこだちじゅつ小太刀術が中心となる。小太刀術とは打刀の長さより短かい刀を用いることに由来する。小太刀術のみを専門にする流派は少なく、通常は剣術の中に附属している。

心極流の流祖は、中条流の富田景政の高弟で小太刀術を得意とした長谷川宗喜である。

山舟生字櫓ヶ森地内に高城飛剣の高弟であった八巻勇治尉寿道の碑があり、神道無念流や心極流の皆伝者佐藤福太郎忠信外8名が建てている。

藤沢周平著「たそがれ清兵衛」が使う小太刀術を心極流といい実在した(映画解説)。

須郷姓

電話帳では、伊達市・伊達郡には見られなく、福島市は2であった。丸森町の金山・大内地区に見える。

大内屋

屋号には、出身地(故郷)や姓名・地形・生業などいろいろな由来がある。

須郷姓、高城飛剣道場門弟の流れなどから、宮城県伊具郡大内村に関連する屋号ではないかと推定される。